

主 題： 絶望の淵に見出す唯一の希望

聖書箇所：詩篇38篇

テーマ：自分自身の罪が原因でもたらされた苦しみの中で、どこに“希望”を見出すのか？

今朝、皆さんとともに見ていきたいみことばは詩篇38篇です。私たちはきょうこの詩篇を通して、「絶望の淵に見出す唯一の希望」について考えてみたいと思います。まず、いつものようにみことばをお読みしますので一つ一つのことばによく目を留めながらそれぞれ追ってみてください。

詩篇38篇 記念のためのダビデの賛歌

「:1 【主】よ。あなたの大きな怒りで私を責めないでください。あなたの激しい憤りで私を懲らしめないでください。:2 あなたの矢が私の中に突き刺さり、あなたの手が私の上に激しく下って来ました。:3 あなたの憤りのため、私の肉には完全なところがなく、私の罪のため私の骨には健全なところがありません。:4 私の咎が、私の頭を越え、重荷のように、私には重すぎるからです。:5 私の傷は、悪臭を放ち、ただれました。それは私の愚かしさのためです。:6 私はかがみ、深くうなだれ、一日中、嘆いて歩いています。:7 私の腰はやけどでおおい尽くされ、私の肉には完全なところがありません。:8 私はしびれ、砕き尽くされ、心の乱れのためにうめいています。:9 主よ。私の願いはすべてあなたの御前にあり、私の嘆きはあなたから隠されていません。:10 私の心はわななきにわななき、私の力は私を見捨て、目の光さえも、私にはなくなりました。:11 私の愛する者や私の友も、私のえやみを避けて立ち、私の近親の者も遠く離れて立っています。:12 私のいのちを求める者はわなを仕掛け、私を痛めつけようとする者は私の破滅を告げ、一日中、欺きを語っています。:13 しかし私には聞こえません。私は耳の聞こえない者のよう。口を開けず話せない者のよう。:14 まことに私は、耳が聞こえず、口で言い争わない人のようです。:15 それは、【主】よ、私があなたを待ち望んでいるからです。わが神、主よ。あなたが答えてくださいますように。:16 私は申しました。「私の足がよろけるとき、彼らが私のことで喜ばず、私に対して高ぶらないようにしてください。」:17 私はつまずき倒れそうであり、私の痛みはいつも私の前にあります。:18 私は自分の咎を言い表し、私の罪で私は不安になっています。:19 しかし私の敵は、活気に満ちて、強く、私を憎む偽り者が多くいます。:20 また、善にかえて悪を報いる者どもは、私が善を追い求めるからといって、私をなじっています。:21 を見捨てないでください。【主】よ。わが神よ。私から遠く離れないでください。:22 急いで私を助けてください。主よ、私の救いよ。」

どんなとき、どんな状況にあっても神様に信頼できる、これは言うまでもなく私たちひとりひとりとって大きな希望をもたらしてくれる真理です。私たちはこの世にいろいろな困難があふれていることを日々目の当たりにします。ウェイン・マックという人物も以前、この世にある難しさに関してこう表現していました。「罪に呪われたこの世の中にあって、私たちが失望を味わうような状況を経験せずに生きていくことは、ほとんど不可能です。自分や愛する者の体調不良、同僚や家族からの嘲笑や嫌がらせ、個人的な失敗、度重なる罪への自覚、周りの世界で起きる出来事、教会内での問題、その他数え切れないほどの問題が存在するのです。私たちの生活の中で落胆に繋がるような出来事を今まさに経験していようとなかろうと、いつかは必ず経験することになるでしょう。イエス様は『あなたがたは、世にあっては患難があります。』（ヨハネ16:33）と警告されていたのです。」と。そして、まさにこのことば通りに、私たちはみな例外なく大小さまざまな数多くの問題に直面し、それらによって思い悩まされたり苦しめられることがあるのです。困難は確かに存在します。しかし、たとえどんな状況に置かれることがあろうと、私たちはいつも神様に身をゆだねて歩んでいくことができるのです。かつて詩篇の著者も、避け所であり力である神様に助けを見出せる喜びを、このように言い表していました。詩篇46:1-3「:1 神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。:2 それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。:3 たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。」と。また思い返してみれば、先週まで皆さんと時間をかけて学ん

だ詩篇37篇でも、ダビデはそのことについて触れていました。彼は長い自分の人生を振り返った時に、正しい者を苦しめる神様に逆らっている悪や悪者が実際にこの世に存在していると、はっきりと認めていました。しかしそんな難しさがある中でも、主に信頼して歩み続けられること、そして、そこにいつも変わらない救いがあることを教えてくれていたのです。詩篇37:39-40でも、彼はこのように口にしていました。「:39 正しい者の救いは、【主】から来る。苦難のときの彼らのとりでは主である。:40 【主】は彼らを助け、彼らを解き放たれる。主は、悪者どもから彼らを解き放ち、彼らを救われる。彼らが主に身を避けるからだ。」と。ですから、たとえ悪が周りを取り囲むことがあろうとも、手に負えないような大きな苦難が降りかかってこようとも、私たちはどんなときも変わらず神様のうちに助けを、慰め喜びを見出すことができる、とみことばは繰り返し教えてくれていました。私たちは避け所である方に身をゆだねて、この方のうちに希望を見出していくことができます。どんな苦しみの中にあろうとも、この方にあって私たちは恐れる必要がないのです。私たちの主はそのような信頼できる偉大な力あるお方でした。

では、ここで少し考えてみてください。確かに私たちは普段いろいろな苦しみを経験します。でももし、私たちが経験している苦しみが、自分自身の罪によってもたらされた場合はどうでしょう？もし自分のとった過去の愚かな行動や、避けるべき罪を自ら選択したことで痛みがもたらされ、それに苦しんでいるのだとすれば、果たしてそんなときは、どこに助けを見出すことができるのでしょうか？さまざまな困難を味わうとき、私たちは確かに神様に身をゆだねることができます。でも、今味わっているその困難が、私たちが身をゆだねるその神様に対して自ら犯した罪が原因であるとするならば、果たして、そんなときは一体どこに希望を見出すことができるのでしょうか？変わることなく神様に信頼を見出すことができるのでしょうか？

時に私たちは大きな失敗をしたり罪を繰り返し犯せば、心のうちで自分自身の信仰を疑い始めることがあります。もちろん、自分の信仰を吟味することは、それぞれにとって非常に欠かせない大切なものです。でも、私たちは自分の愚かさや失意に心が支配されて、喜びを失ってしまうこともあるのです。こんな愚かなことをした自分など、もう役に立たないどうしようもない存在だ。神様はもうこんな罪深い自分のことなど覚えておられないだろう、遠く離れてしまってもう私に答えてなどくださらないだろう、そもそもこんな自分は救われていないかもしれない、と罪悪感に心が押しつぶされるその中で、次第に主に対する確信を失い、不安や恐れを覚え、希望を見出すことができなくなってしまう、そのような経験を皆さんはこれまでにされることがあるかもしれません。

ほかのだれでもない自分自身の犯した罪が原因で苦しむとき、私たちは一体どこに、もっと言えばどのようにして希望を見出すことができるのでしょうか？感謝なことに、みことばその問いに対する答えをはっきりと教えてくれていました。きょう私たちが見ていく詩篇38篇を記したダビデは、まさに自分自身が犯した罪によってひどい苦痛を経験していました。ダビデは少なくとも四つのものによって深く悩まされていました。

●ダビデの味わっていた四つの苦しみ：

- a) 罪悪感 4節 一つ目は、押しつぶされそうになるほどの罪悪感でした。4節にこう書いています。「私の咎が、私の頭を越え、重荷のように、私には重すぎるからです。」ダビデは自分の咎によって罪悪感に圧倒され苛まれていました。
- b) 病 5, 7節 二つ目は、いのちを脅かすほどの何かしらの病でした。5節「私の傷は、悪臭を放ち、ただれました。それは私の愚かしさのためです。」また7節「私の腰はやけどでおおい尽くされ、私の肉には完全なところがありません。」
- c) 孤独 11節 三つ目は、孤独でした。11節にこう書いています。「私の愛する者や私の友も、私のえやみを避けて立ち、私の近親の者も遠く離れて立っています。」かつてダビデのことを愛していた家族や友

人も、彼から遠く離れて近寄ろうとはしませんでした。死にそんなほどの病を患って、今まさに助けや慰めを必要とするその中で、だれも彼に手を伸ばそうとする者はいなかったのです。皆さん、これだけでもひどい苦しみだと思いませんか？でもそれだけではありませんでした。

d) 敵の攻撃 12, 19節 四つ目は、弱さにつけ込んで攻撃してくる多くの敵たちの存在でした。

12、19節にこのように記されています。12節「私のいのちを求める者はわなを仕掛け、私を痛めつけようとする者は私の破滅を告げ、一日中、欺きを語っています。」また19節を見ても、「しかし私の敵は、活気に満ちて、強く、私を憎む偽り者が多くいます。」と。間違いなくダビデは最悪の状況に置かれていました。自分の犯した罪から来る罪悪感や病によって心身ともに打ちのめされ、周りには助けてくれる者がいないばかりか、見渡せば彼を痛めつけようとする敵であふれかえっていたのです。具体的にどんな罪を彼が犯したのかは、この詩篇からはわかりません。でも、ダビデは自分の犯したその罪に対する主の厳しい懲らしめを経験し、どこにも助けを見出すことのできないような状況にありました。自分自身のしたことを責め続けて、死が迫ってくるその中で何もかも諦めてしまってもおかしくないような、そんな状況にあったのです。彼はまさに絶望の淵に立たされていました。

でも、そのような中であってもダビデは希望を見出すことができたのです。彼は絶望的な状況の中でも、すべてを諦めることはありませんでした。一体どのようにしてそれができたのでしょうか？それは、唯一の希望である神様に信頼して、その方に助けを祈り求めたからでした。ダビデは自分の罪で苦しんでいるときも、自分にとっての唯一の救いである主を変わず呼び求めているのです。そしてそんなダビデの姿こそ、今を生きる私たちひとりひとりも学ばなければならない大切な模範になります。

では一体、ダビデは具体的にどのようにして主に祈りをささげ、どのようにして信頼して歩んだのか、今回は大きく三つに分けて考えてみましょう。ダビデのささげた祈りの三つの要素です。もし、この中に自分の犯した罪によって今思い悩んでいる方がおられるのであれば、またこの先、自分自身が犯した罪によってひどい苦しみを味わったり、神様の懲らしめを受けるようなときには、ぜひこのみことばの真理を思い返してみてください。これが皆さんの励ましと慰めになることを心から祈っています。

○絶望の淵でささげたダビデの祈り：三つの要素

1. 主のあわれみを求める祈り 1-8節

一つ目の要素を1-8節に見て取ることができます。まず一つ目の要素は、「主のあわれみを求める祈り」です。このように1節は始まっていました。「【主】よ。あなたの大きな怒りで私を責めないでください。あなたの激しい憤りで私を懲らしめないでください。」ここで皆さんに注目してほしいポイントがあります。それはダビデが「【主】よ。私を責めないでください。」また「私を懲らしめないでください。」とは言ってなかったということです。よく見てください。彼は「【主】よ。あなたの大きな怒りで私を責めないでください。あなたの激しい憤りで私を懲らしめないでください。」と書いていました。つまり、ここでダビデは、主の懲らしめ自体を拒んでいたのではなかったということです。むしろ彼は自分自身の身に降りかかるその懲らしめを、自分のこととして受け入れていました。またもっと言うなら、ダビデはここで「責め」と「懲らしめ」という二つのことば（動詞）を用いていました。この「責め」ということばには、「叱責する」とか「正しい道を示す」といった意味が含まれています。また「懲らしめ」ということばには「教える」とか「戒める」「罰を与えて間違いを強制する」といった意味が含まれています。ですから、どちらのことばも、ただ「罰を与える」といった意味よりも、「間違っている者を戒めて、正しい道へと引き戻す」という部分に焦点が当たっています。ですから、ダビデはここで、主の懲らしめというものをただ受け入れていただけではなく、自分がその懲らしめに価値を、主によって正されなければならない間違った存在なのだ、と素直に認めていたということです。ダビデは、今ひどい苦しみの中に置かれているのは、私自身が犯した罪や過ちが原因なのだ、だからもし、私がそれを責められるなら、当然私はそれに価値を置く存在なのだ、と正しく認識していたというわけ

です。ダビデは主の懲らしめに対して、自分は価しないと怒りを燃やしていたのでも、あまりの主の厳しさに不満を口にしていたのでもありません。彼は、自分自身の愚かさや罪深さを正しく覚えるときに、聖い神様からの戒めや憤りに対して、当然それが自分に価するものだとよくわかっていました。自分の愚かさをよくわかっていたのです。でもそんな中で、神様が怒りの代わりに、本来は自分なんかには決して価することのない“あわれみ”を示してくださることを切に願っていました。ダビデはあわれみを何よりも必要としていました。最初にも少し見ましたが、彼は罪ゆえに、あまりにも大きな苦しみを経験していたのです。2節から見ていただくと「:2 あなたの矢が私の中に突き刺さり、あなたの手が私の上に激しく下って来ました。:3 あなたの憤りのため、私の肉には完全なところがなく、私の罪のため、私の骨には健全なところがありません。:4 私の咎が、私の頭を越え、重荷のように、私には重すぎるからです。」と。ダビデは、自分の罪に対する厳しい懲らしめによって、押しつぶされそうになっていました。痛みや罪悪感に心は思い悩み、それだけでなく、からだの部分にも健全なところはありませんでした。言い換えれば、彼は病によってひどく苦しんでいたのです。

ここで少し覚えていてほしいことは、神様は時に病気というものを使って信仰者を懲らしめることがある、ということです。私たちの神様は、私たちのうちに存在している罪や間違いというものを正すために、私たちが頑なに拒んでいるそのような罪というものを正しく戒めるために、時に病を用いてそのことをなさることもあるのです。ただ勘違いしてほしくないのは、もちろんこれは、私たちの患う病のすべてが自分たちの犯した罪が直接の原因だということではありません。たとえば、ヨブがまさにそうでしたね。遠くから見た友人たちは、本人であることを見分けがつかないほどひどい腫物を患っていたヨブでしたが、そんな彼のことを神様はこう表現していたのです。ヨブ1:8に「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいないのだが。」でもそんな潔白な人物にもひどい病は下ったのです。またそれだけではありません。道の途中で生まれつきの盲目の人をご覧になったイエス様も、弟子たちに対してこのように答えている様子が、ヨハネ9:2-3に記されています。「:2 弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。:3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」と。このようなみことばからもわかるように、私たちの患う病気のすべてが、自分たちの罪が直接の原因ではありません。でも皆さん、同時にみことばのうちには、罪を犯した信仰者を戒めるために、聖い神様が病気や死さえも用いられることがあるという様子を、見て取ることもできるのです。たとえば、主の晩餐に関することを教えていたパウロが、ふさわしくないままでそれにあずかった数多くの者が、実際に亡くなったことを書き記していました。Iコリント11:29-30にこう記されています。「:29 みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくことになります。:30 そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。」だからこそ、確かにすべての病が私たちの罪が直接の原因ではないにしろ、私たち自身が病気や弱さを覚えるようなときには、立ち止まって自分自身に問いかけてみることもできるのです。今経験しているこの苦しみは、自分が罪を犯したからなのだろうか？神様はこれを通して自分のうちにある告白していない罪を、頑なに隠そうとしているその罪を示そうとされているのだろうか？私たちのうちにある間違いを、神様は愛のゆえに正そう、愛のゆえに戒めよう、よりキリストに似た者と変えよう、とされているのだろうか？

でも今回見ているダビデの場合、その原因は明白でした。彼は自分の犯した罪のゆえに苦しんでいたのです。彼は自分の味わっている苦痛について、続く5節からこのように述べていました。「:5 私の傷は、悪臭を放ち、ただれました。それは私の愚かしさのためです。:6 私はかがみ、深くうなだれ、一日中、嘆いて歩いています。:7 私の腰はやけどでおおい尽くされ、私の肉には完全なところがありません。:8 私はしびれ、砕き尽くされ、心の乱れのためにうめいています。」実際どのような病をダビデが患っていたのかをここか

ら知ることは私たちにはできません。でも今のことばを読んだだけでも容易にひどいものであったということは想像できません？ダビデは「私の傷は、悪臭を放ち、ただれました。」と口にしていました。たとえば、この「悪臭」ということばだけを考えても、これは、あのモーセが水を打って血に変えたときのナイル川の様子を表すのにも使われたことばでした。そのことが出エジプト記7：21に記されています。「ナイルの魚は死に、ナイルは臭くなり、エジプト人はナイルの水を飲むことができなくなった。」と。ここで出てきていた「ナイルは臭くなり」のこの「臭くなり」というのが「悪臭」と同じことばになります。これがどれほどひどい匂いだったのかは言うまでもないでしょう。ダビデのからだはそんな不快な匂いがするような傷を患って、苦痛にあふれていたのです。間違いなく彼は肉体的にも精神的にもひどく弱っていました。重い病気にかかっていたダビデのからだはさいなまれ、痛みで活力を失っていました。彼のすべてが主の懲らしめによって打ち砕かれ、一日中嘆くことしかできないような状態にあったのです。ダビデのうちにはこの状況を変えることのできる力など一切ありませんでした。では、そんな苦しみの中で、ダビデは一体何をしたのでしょうか？それは、自分の罪深さを素直に認めて、ただ主のあわれみを求めることでした。そして皆さん、これが罪を犯したすべての人が持つべき最も適切で、最も大切な態度になります。ダビデは自分自身の犯した罪を認めて、その罪に伴う結果や罰を自分のこととして受け入れていました。あまりにも多くの苦しみをもたらしたその罪に関して、彼は言い訳をすることもなければ、自分自身の無実さを必死に訴えることもしませんでした。彼は自分が犯したその罪のゆえに大きな懲らしめを今受けている、ということ素直にそのまま受け入れていたのです。罪を罪として認めていました。

では、私たち自身は罪というものをどのように取り扱っているのでしょうか？私たちは時に自分の罪をほかの人のせいにして責任を擦り付けてしまうことがあります。罪をそのまま受け入れるということをしなことがあります。罪を犯しても、心の中では自分が正しいと信じていたり、その罪ゆえに自分に降りかかってくるような罰や結果に対しても、いやいや自分はこんなものには価値ないと、いらだっているかもしれません。聖い神様の目を覚えることよりも、周りの人の目を気にして罪を過小評価することもあるかもしれません。この罪は、べつに大したことはないです、ちょっとしたミスでしかありません。ちょっとした間違いでしかありません。みんなもやっているから自分も少しやっただころでべつに問題ない…そのようにして、罪を罪として頑なに認めようとしていないかもしれません。私たちが自分の基準によって、これは間違っている、あれはOKと、神様の基準を忘れて判断しているかもしれません。けれど、ダビデはそうはしていませんでした。このようにして罪を過小評価することは、神様の前にふさわしい罪人の姿ではないのです。

ダビデは自分の罪を罪として認めていました。主の厳しい懲らしめを受ける中で、愚かな自分には確かにそれが価値があると、そう素直に受け入れていました。そしてそんな自分自身の罪深さを覚える中で、聖い神様の前にどれだけ自分が愚かな者なのかを覚える中で、本来なら絶対に自分には価値のないその主のあわれみというものを、彼は、ただへりくだって求めていたのです。私には価値がない、わかっている、でも、私には主のあわれみが必要だと。果たして私たち自身は、この主のあわれみを求めるのにふさわしい態度をしているのでしょうか？自分の罪を罪として認めているのでしょうか？ダビデはそのように祈っていました。そしてこれが一つ目の要素「主のあわれみを求める祈り」でした。

2. 主の応答を求める祈り 9-15節

次に絶望の淵にささげたダビデの祈りの二つ目の要素を私たちは9-15節に見て取ることができます。二つ目の要素は「主の応答を求める祈り」です。「あなたの怒りで私を責めないでください。」と主のあわれみを最初に求めたダビデは、再び9節で「【主】よ。」と呼び求めています。9節「【主】よ。私の願いはすべてあなたの御前にあり、私の嘆きはあなたから隠されていません。」ダビデは何を言わんとしたのでしょうか。ダビデはここで、自分の愛する神様の姿に心を留めていました。彼はさまざまな苦

しみを経験する中で、私の主は、私の願いを、私の嘆きを、すべてをいつも覚えて知っていてくださるお方なのだ、とそう覚えていたのです。考えてみてください。ダビデの置かれていた状況を考えてみれば、容易にこんな考えに陥ってもおかしくなかったでしょう。…こんなひどい懲らしめを受ける自分のことなど神様はもう心に留めてはおられないのかもしれない。自分の辛さや痛みも神様は覚えておられないのかもしれない。こんな罪深い自分などもう見捨てられてしまったのかもしれない…。でも、ダビデは、主の厳しい懲らしめを受けるその中にあっても、そのような思いに心が揺らぐことはありませんでした。彼はどんなときも、自分の愛する主の姿を忘れることはなかったのです。だからこそ、彼は自分の今の状態も、置かれている厳しい状況も、抱えている心の重荷や願いも、そのすべてをご存じの全知なる神様に助けを求めているのです。ダビデは自分のうめき声さえも聞き入れてくださって、苦難の中で自分が何を切望しているのかということも知っておられる、そんな方のうちに慰めを見出そうとしていました。

そして、そのようにすべてを知っておられる主に対して、彼は続けて自分の味わう苦しみについて口にするのです。10節からさらに彼はこう述べていました。「:10 私の心はわななきにわななき、私の力は私を見捨て、目の光さえも、私にはなくなりました。:11 私の愛する者や私の友も、私のえやみを避けて立ち、私の近親の者も遠く離れて立っています。:12 私のいのちを求める者はわなを仕掛け、私を痛めつけようとする者は私の破滅を告げ、一日中、欺きを語っています。」「私の心はわななきにわななき」と。ダビデの心は不安であふれかえっていました。それはわかりますね。これまで見てきたように、彼のからだは外にも内にも痛みを抱えていました。落ち着いて休むことなどできないほど弱り切っていたのです。また10節の最後に書いていた、「目の光さえも、私にはなくなりました。」「目の光をなくした」というこのことばは、文字通り「実際の視力を失う」と取ることもできますが、それ以上に「その人のいのちや生命力を失う」ということを意味していたりもします。つまり、厳しい懲らしめを受けて苦しむダビデは、罪悪感や病によってからだも心も衰え果て、いのちさえも危うい状態に置かれていたということです。ですから彼は、だれがどう見ても辛い状況にありました。まさにどこにも希望が見出せないような絶望的な状況に取り囲まれていました。でもこれで終わりでもありません。さらに悲しいことに彼の周りには頼ることのできる人はひとりもいませんでした。11節にこうありました。「私の愛する者や私の友も、私のえやみを避けて立ち、私の近親の者も遠く離れて立っています。」彼の友人や家族もダビデの「えやみ」（簡潔に言えば重大な病）を目の当たりにし、助けを与えようとするのではなくて、遠く離れてしまっていたのです。もしかしたら先に見たように、ダビデの傷があまりにもひどい匂いだったからかもしれません。かつて自分のことを愛した者たちも本当に愛を必要とするそのときには、彼を見捨てて手を差し伸べようとはしなかったのです。そしてそれに加えて、自分のいのちを狙い痛めつけようとする者たちが、いろいろなわなを仕掛けてダビデを滅ぼそうとその機会を熱心に探し求めていました。一日中、欺きを語っていたのです。何度も繰り返していることですが、彼の経験していた苦しみは、どう考えてみても、とてつもなく辛いものでした。どう思います？どこにも希望はなかったのです。自分の内側を見ても、そこには罪悪感があふれていて、外側を見ると、そこには病によって打ちのめされ、手を差し伸べてくれる助け手もなく、彼のいのちを狙う数多くの敵が攻撃しよう待ち構えていたのです。間違いなくダビデは絶望の淵に立たされていました。

しかし、そんなどうしようもない状況にあって驚くべきことは、彼はそのような状況に圧倒されて心を奪われるようなことはなかった、ということです。周りのどこにも助けを見出すことができない中にあって、彼は動揺してすべてを諦めてしまうことはありませんでした。どうしてわかるのか？彼は13、14節にこう記すのです。「:13 しかし私には聞こえません。私は耳の聞こえない者のよう。口を開かず話せない者のよう。:14 まことに私は、耳が聞こえず、口で言い争わない人のようです。」と。ちょっとこのときの状況を思い描いてみてください。今さっき見たようにダビデは彼のいのちを狙う者たちから攻撃

を受けて、一日中、あざけりや偽りのことばによって責められていたのです。中傷する者たちから、ありもしないようなことで傷つけられていました。ことばによってダビデは苦しめられていたのです。しかしそんな彼らのことばに対して、ダビデは自分自身で言い返したり反論したりすることはありませんでした。だから彼は言うのです。「私には聞こえません。」と。そんな敵の発するあらゆることばが、まるで自分の耳には届いていないかのようにふるまって、彼は自分で自分の正しさを弁護しようとしたり、そのような者たちと言い争うことはしませんでした。「私は耳が聞こえない者のようです」「口を開こうともしません」と。でも、もちろんこれは、ダビデが敵の巧みなことばによって言い負かされてしまって、本当は何か言いたいだけけれどなんと答えればいいかわからないので黙っていた、というわけでもないのです。では、どうしてダビデは黙っていたのか？それはただ主に信頼し、主にすべてをゆだねていたからこそ、彼らに対して口を開くことをしなかったのです。そのことに関して15節にこう記されていました。「それは、【主】よ、私があなたを待ち望んでいるからです。わが神、主よ。あなたが答えてくださいますように。」「私は口を開きません。なぜなら、それは【主】よ。私があなたを待ち望んでいるからです。」と。こうしてダビデは、ほかのだれでもない主が自分に答えてくださることを熱心に求めていました。

ここで私たちが覚えるべき大切な事実があります。それは、罪を犯してその罪によってひどい懲らしめにあったダビデが助けを求めたのは、やはり神様だったということです。罪悪感や病、人との関係といったさまざまな問題に取り囲まれて、ましてやそのような問題をもたらしたのが自分自身の罪であったとしても、罪を犯してしまったダビデは、ただ主の前に罪を認めてへりくだり、そしてこの方に身をゆだねて、どうかしてこの方のうちに希望を見出そうとしていたということです。ダビデは困難の中にあって、主の前にへりくだって、近づいて、ほかのだれでもないこの方が自分に応答してくださるのを待ち望み続けていました。忍耐を持って、あわれみ深い主の答えを待ち続けていたのです。それが二つ目の要素でした。

3. 主の助けを求める祈り 16-22節

そして最後、絶望の淵でダビデがささげた祈りの三つ目の要素が、残された16-22節に見て取ることができます。三つ目は「主の助けを求める祈り」です。16節からこのように記されています。

「:16 私は申しました。「私の足がよろけるとき、彼らが私のことで喜ばず、私に対して高ぶらないようにしてください。:17 私はつまずき倒れそうであり、私の痛みはいつも私の前にあります。:18 私は自分の咎を言い表し、私の罪で私は不安になっています。:19 しかし私の敵は、活気に満ちて、強く、私を憎む偽り者が多くいます。:20 また、善にかえて悪を報いる者どもは、私が善を追い求めるからといって、私をなじっています。」これまでと同じように、ダビデはここでも自分自身が抱えていた苦しみを、特に彼のことを憎んで悪を働くそんな敵たちのことを取り上げていました。彼の敵たちは活気にあふれていて、数多くの者がいました。そのような敵たちに囲まれる中であって、彼は大きく傷つき、その痛みによって打ちのめされていたのです。17節にもこんなふうには書いていましたね。「私はつまずき倒れそうであり、私の痛みはいつも私の前にあります。」これは言い換えれば、「私はもう今にも完全に倒れてしまいそうな極限の状態にある」ということです。死の危険にさらされて、今すぐに助けが与えられなければ、もう私は完全に倒れて手遅れになってしまうと。そんな絶望的な状況に置かれていました。でも、そんな厳しい状況にあっても、ダビデは変わらず主に信頼してました。そして何よりも、彼はここでも自分自身の罪を素直に認めて、神様の前にその罪を告白していたのです。18節にはっきりと書いていましたね。「私は自分の咎を言い表し、」と。やはりダビデは、だれかほかの人の罪を責めたりするのでも、自分自身の罪を言い訳するのでもありませんでした。彼は自分の罪を隠そうともしなかったし、自分の犯したその罪のもたらす結果を、自分には価値ないと否定することはありませんでした。彼は自分が犯した罪を自分のものとして認めて、その結果さえも受け入れていたのです。確かに、彼はありとあらゆる苦難を受けて

いました。でもその苦難の降りかかる中であって、なお、自分の犯した罪を神様の前に正直に認めて告白していたのです。そして、そこにある主のあわれみを見出そうとしていました。別のみことばもこんなことを教えてくれています。箴言 28 : 13 - 14 に「:13 自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。:14 幸いなことよ。いつも主を恐れている人は。しかし、心をかたくなにする人はわざわざに陥る。」と。罪人が自分の罪を認めて告白するとき、そこに私たちは主のあわれみを見出すことができます。

思い返してみてください。私たち自身もまず、何よりもキリストにあって主の大きなあわれみというものを受けました。かつて創造主である聖い神様に逆らって思いのままに罪を生きていた私たちに働いたもの、それはただその罪に対する神様からの正しい御怒りであり、永遠のさばきでしかありませんでした。しかしそんな私たちが恵みによって自分の罪深さに気づかされた時、神様に逆らうその罪を自分のこととして認めて悔い改めた時、私たちが主の前に自分自身の罪を告白しイエス・キリストを自分の主として救い主として信じ受け入れた時、私たちはことばで言い表すことのできないほどの大きなあわれみを受けました。本来であれば、生まれながらに御怒りを受けるべき存在でしかなかったにもかかわらず、ただ恵みによってあわれみ豊かな神様は愛を示してくださり、罪過の中に死んでいた私たちをキリストとともに生かしてくださったのです。こうして本来ならば絶対に働かないあわれみを、恵み深い主が私たちに与えてくださいました。

主の懲らしめを受けて敵によって苦しめられていたダビデは、このあわれみ深い神様のあわれみを求めていました。彼は自分の力で状況を変えることができるなど、到底思っていませんでした。だからこそ、自分の罪を心から悔い改めた彼は、ただ自分を救い出すことのできる唯一の希望であり、唯一必要なあわれみを与えることのできるお方に心を留めて歩んだのです。ですから最後 21 - 22 節を見るとこう記していました。「:21 私を見捨てないでください。【主】よ。わが神よ。私から遠く離れないでください。:22 急いで私を助けてください。主よ、私の救いよ。」と。皆さん気づかれましたか？ここでダビデは神様に対して、三つの異なることばを用いていました。21 節を見ると、最初には「【主】よ」と太文字のことばが出てきます。太文字のことばには「ヤハウエ」という名前が用いられています。つまりダビデは、自分自身と個人的な関係にある、いつも誠実で約束を必ず果たされるそんな契約の神に向かって、「私を見捨てないでください」と訴えていたのです。また同じ 21 節のところに出てくる「わが神」ということばには「エロヒム」という名前が用いられていました。ダビデは、自分自身の神様である、偉大な力を持つ、どんなものにも勝る最高の権威を持ったそのお方に向かって、私から遠く離れないでくださいと訴えていたのです。そして最後三つ目に 22 節に出てくる「主よ」ということばには「アドナイ」という名が用いられていました。つまりダビデは、ありとあらゆることを支配しておられる主権者なるお方、すべての支配者なるそのお方に向かって、「急いで私を助けてください。」と訴えていたのです。ダビデは、どこに自分に必要な助けがあるのかが分かっていた。どこに自分に必要なあわれみや慰め希望があるのかをよくわかっていました。だからこそ、たとえ自分自身の罪が原因でひどい苦しみに合っているようなときでさえも、彼は変わらずにその方に目を向けて歩んでいたのです。

そして皆さん、私たちもきょう同じこの主に、どんなときも信頼して生きていくことができます。ダビデは確かに罪を犯しました。そして、その罪が原因で自分自身が主の懲らしめを受けているのだということも、彼はよくわかっていました。私たち自身もそのような場面に直面することは今も、そしてこれから先もあるでしょう。ではそんなときに私たちはどこに希望を見出すことができるのでしょうか？それは、どんなときも変わることはないこのあわれみ深い神様のうちです。だからこそ、罪悪感などに心が押しつぶされて主に対する確信を失うような、不安や恐れを覚えて希望を見出せなくなるようなことがもしあるのなら、思い出すことです。聖く正しいあわれみ深い神様は、確かに大きな罪を犯して、確かに大きな懲らしめを受けていたダビデを見捨てることはありませんでした。ご自分の子どもを愛する

からこそ、あわれみを示されたのです。自分の子どもを愛するからこそ、確かに厳しい懲らしめを与えることはありました。でも、ダビデが心から悔い改めて、自分の罪を告白するなら、そこにいつも主のあわれみがありました。ダビデはそこにより頼んで生きていたのです。

ダビデがそのように生きることができたのなら、私たちはダビデ以上にそのような希望を持って生きていくことができます。なぜなら、考えてみてください。私たちが何かをしたからではなく、主イエス・キリストが自ら進んで、私やあなたのような罪人のために十字架にかかってくださり、そしてその身に罪を負って死んでくださいました。私たちにはどうすることもできなかったその罪の問題を、罪を知らないお方が、ただ大きなあわれみのゆえに身代わりとなって、その問題を解決してくださったのです。そして今、恵みによってこの方を信じるその信仰によって義と認められた私たちひとりひとは、主イエス・キリストによって、もうすでに神様との平和を持つ者とされているのです。

皆さん、ただあわれみ深い主のそのあわれみによって救われて生きている者は、たとえどんなことがあるとしても、この主の同じあわれみにいつもすがりついて信頼し、そしてここに希望を見出して生きていくことができるのです。たとえどんな苦しみのときも、主の助けを求めて生きていくことができます。罪を犯せば、その罪を自分のこととして認めて、心から悔い改めて主に告白することです。私たちはその時に、この方のあわれみを見ることができます。私たちはこの方のあわれみのうちに、唯一の希望を見出して歩み続けることができます。だからこそ皆さん、どんなときも主に信頼して、この主の姿を覚えてともに歩んでいきましょう。